

説教余滴 2020年6月7日《濃厚接触》

最近のコロナ感染症拡大防止ということでよく知られ、用いられるようになった言葉です。

私が、この言葉に触れたのは、御殿場教会牧師になった年のことでした。1980年のことです。就任間もなく、棟居勇牧師からのハガキが届きました。

「御殿場とは良いところへ行ってくれた。早速、駿河療養所内の神山教会へ、大日向繁牧師を尋ねてほしい。」大日向牧師と役員全員が歓迎してくださいました。先生は、ご自身ハンセン病の元患者。岡山県の長島愛生園時代に長島聖書学舎に学び、教団の検定試験を経て牧師になられました。先生は、ハンセン病についていろいろ教えてくださいました。

まずこの病気のもとになるのは、大変弱いウイルスで、結核と同じ桿状菌です。結核治療のための特効薬を研究しているとき、新薬が、ハンセン病にも効果がある、と分かり、プロミン誕生となりました。「不治の業病」と言われてきたものが薬で治せる感染症となりました。

このウイルスの弱さは、二つのことで示されました。

生きたウイルスを取り出し培養することが難しかった。日光にさらすとすぐに死んでしまう。ようやくノルウエーのハンセンさんがウイルス特定に成功。以来ハンセン病と呼ばれています。

もう一つは、なかなか感染しないことです。《濃厚接触があつて、はじめて感染します》。どういうことですか。《一つの家族が、四六時中一緒にいて、タオルも食器も布団なども共同使用》、納得しました。寝食を共にする、肌身を触れ合わせるように密接な関係のことでした。毎月お訪ねしますが、教会の人たち自身、そうしたかかわり方を避けているようでした。

今、コロナが猖獗を極めています。恐れと不安を引き起こしています。インフルエンザと同種のウイルスの活動です。必ず特効薬が生まれます。やまない雨はありません。朝は来ます。